

爺爺の俳句ごっこ入門（五）

河村正浩

第九章 実況中継 俳句の生まれる現場

私の俳句実作法の一例として、朝起きてから夕方迄の行動や、一人吟行の様子などを文章と俳句で構成。多くの方から感想を戴いたが、指導者クラスはもとより初心者クラスの方には、この章が最も受けたようである。その一例、

昼食、娘の作ってくれた焼きうどんでそそくさに、

昼食は焼うどんですそそくさに

休憩後、検査入院のための買い物に行く。

マスクして入院用具買いに行く

店内を見て回るうちに白菜や春菊を買って…

寒い寒い今夜は鍋にしようかな

吟行句での推敲例

寒水に五重塔の揺るぎなし

「寒水」では池のイメージが出ない。

寒の池に五重塔の揺るぎなし

リズムが悪い。

揺るぎなき五重の塔や寒の池

だめだ、ならば、

凍空に五重の塔の揺るぎなし

本書は発行後、新聞三紙と地元ケーブルテレビで報道された。希望者には送料一八〇円分の切手を同封して申し込んで頂ければ進呈することにした。又、私が講師をしているショッピングモール内のカルチャーセンターでも希望者には進呈することにした。沢山の申し込みが来たが、ほとんどが初心者クラスの俳人で

あった。ロコミでかなり広がり、手持ちもなくなり再発行もした。俳句に縁のない方は十数名あったが、この本を読んで私も俳句が作れるような気がしますという方が二名あった。ある指導者からは、「俳句を始めて間もない人、俳句に行き詰まった人にとって、或いは楽しく俳句を詠もうとする大人や子どもにとって嬉しい一冊」「日常の生活を言葉に短詩に変身させ俳句にってしまうとは…。俳句というハードル（垣根）を下げて大衆のものに変えてしまう楽しさ、入門書として読ませて頂きました」という嬉しいお手紙を頂いた。

又、大変親しくして頂いている老匠からの一句。

駄句なるぞ卓上扇が首振れり

この最高の賛辞は見事で、一本取られた。

本書は、「非真面目」「娯楽性」をキーワードとした私の初の試みであるが、改めて一連の作品を眺めると、「今、俳句に求められているのは諧謔性ではなかろうか」と思う。それは井本農一の「俳句イロニー説」であり、伊丹三樹彦提唱の「俳句の三味はユーモア、アイロニー、ペーソス」であり、山本健吉の言った「俳句の本質は滑稽、挨拶、即興」である。だが、こうした提言を前面に出すと、かえって真面目で堅苦しく、俳句が難しくなってしまう気もする。

大衆に対し、俳句をより身近にするには、敷居を低くするには、俳句の方から歩み寄り、興味の湧く何らかの工夫が必要ではないかと思う。改めて、俳句の入り口としての滑稽や娯楽性、面白さなどについて考えていきたいと思う。

ユネスコ無形文化遺産登録をめざす俳句だが、もっと気楽に日本の全国民が親しめてこそ、その価値があるとは言えまいか。

終